

ひきこもり親和性の高い大学生における心理的特徴の検討

—友人関係, 不快情動回避傾向, 早期完了特徴との関連について—

牧 亮太・海田梨香子・湯澤正通

An examination of psychological traits of young people who show an affinity for social withdrawal

Ryouta Maki, Rikako Kaita, and Masamichi Yuzawa

本研究では、内閣府 (2010) のひきこもり実態調査で用いられた質問項目を使用し、一般大学生を、ひきこもりに対して肯定的態度を示す者 (ひきこもり親和性高群) とそうでない者 (ひきこもり親和性低群) に分け、ひきこもり親和性高群における心理的特徴 (友人関係, 不快情動回避傾向, 早期完了特徴) について検討した。その結果、ひきこもり親和性高群には、友人関係における自己閉鎖的な傾向が見られること、男性に限っては友人に対して積極的な関与を回避する傾向にあることが示された。また、不快情動の回避傾向、および早期完了特徴にはひきこもり親和性の高低による違いは見られなかった。これらの結果より、ひきこもり親和性の高い大学生が、必ずしもひきこもりに陥りやすいというわけではなく、むしろ友人関係に困難を抱えながらも、不快な情動と向き合いつつ、社会に適応している可能性が示された。深刻なひきこもり状態を回避する要因を探るうえで、ひきこもりに肯定的な態度を示す人たちに注目することの重要性が示唆された。

キーワード: ひきこもり, ひきこもり親和性, 大学生, 友人関係

問題

「ひきこもり」とは、「さまざまな要因によって社会的な参加の場がせばまり、就労や就学などの自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている状態」である (厚生労働省, 2010)。ひきこもりは、その背景によって2つに分類されるが、昨今、その増加が指摘され、社会的にも注目を集めている現象が、統合失調症やうつ病などの内因性精神疾患以外で、6 か月以上にわたって自宅にひきこもり、学校や仕事などの社会的な活動に参加しない状態が持続している「社会的ひきこもり」である (岡本, 2003; 斉藤, 1998)。現在、自室や家からほとんど出ない者、コンビニや趣味のときだけ出かける者といった社会的ひきこもりに該当する子ども・若者は全国で約 69.6 人にのぼると推定されている (内閣府, 2010)。

これまで、ひきこもりに共通する心理的傾向の研究は数多く行われ (e.g., 松本, 2003), ひきこもりの背景要因として、対人関係の希薄さ, アイデンティティの未確立, 強い自己愛などが指摘され

てきた(村尾, 2005)。しかし, このような特徴は, 実際にひきこもっている一部の若者だけでなく, 現代の若者全般に見られる特徴として論じられることがある(斉藤, 1998)。事実, 内閣府(2010)によると, ひきこもりには該当しないものの, ひきこもりに対して肯定的な態度を示す「ひきこもり親和群」は約155万人と推計されており, ひきこもりという問題を考えるうえで, ひきこもりには至らないまでもひきこもりに親和的な態度を示す若者は無視できない存在といえる。そのため, ひきこもり親和性の高い若者にはどのような心理的特性が見られるのかを明らかにすることは, ひきこもりの心理的特性に関する研究と同様に重要であろう。そこで本研究では, ひきこもりに対して肯定的な態度を示す若者の心理的特性を明らかにすることを目的とし, 一般大学生をひきこもりに対する親和性が高い群とそうでない群に分け, 2群における心理的特性の比較を行うこととした。

では, ひきこもりに対して親和性を示す若者の心理的傾向にはどのような特徴が見られるのであろうか。ひきこもりの実像として, 「長期に渡って, 自室・自宅に閉じこもり, 家族以外の人とは, ほとんど接触しない状態」ではなく, 「外出もしばしばするし, 人ともそこそこ関わり, アルバイトもする。しかしそれが深まるのが難しく続かない」という人がかなり多くいることが指摘されている(厚生労働省, 2003; 加藤, 2005)。さらに, ひきこもりに関与する心的特性を検討した蔵本(2008)は, ひきこもり群と対照群との判別にもっとも大きく寄与しているのは, 「対人交流開始の困難」ではなく「対人交流維持の困難」であることを明らかにしている。これらの知見より, 社会的ひきこもりの背景として, 他者との交流そのものを避けようとしているのではなく, 対人関係において表面的な人付き合いを志向し, トラブルを回避しようとする傾向がうかがえる。しかしその一方で, このような特徴は現代の若者全般に見られることも指摘されている(e.g., 岡田, 2007)。つまり, 対人関係の問題は, ひきこもりと関連していながらも, 若者全般に共通して見られる特徴ともいえるのである。おそらく, ひきこもりに至っていない若者の中にも対人関係上の問題を抱えている者は多く存在し, このような人たちがひきこもりに対して親和的な態度を示す可能性は十分に予測される。そこで本研究では, ひきこもり親和群に関連する1つ目の指標として, 現代青年の友人関係の特徴を測定する友人関係尺度(岡田, 1999)を用いることとした。

さらに現代青年に見られる特徴として, 少子化および経済的豊かさという時代背景のなか, 親から過剰な期待をかけられ, 相互交流を欠いた一方的な対応によって生み出された自己愛の強さも挙げられる(村尾, 2005)。村尾(2005)によると, このような人々は自己中心的なだけでなく, 非常に脆く傷つきやすい。そのため, 不快な情動を引き起こすであろう事態や出来事との直面を避けようとする傾向も強いと思われる。田中(2005)は, ひきこもりのきっかけが具体的であれ, 曖昧であれ, いずれの場合も「自分を守るため」である点で共通していると述べているが, 傷つきやすさからくる回避傾向もひきこもりと関連することが予想される。そこで2つ目の指標として, ある出来事によって喚起される不快な情動(抑うつ・不安), またはそれに伴う苦痛をしっかりと実感し, 自らのものとして受け止めることの困難さを測定する不快情動回避心性尺度(福森・小川, 2005)を用いることとした。

また, 山田(2003)は, ひきこもりを発達における「自分探し」の過程と位置づけ, J. E. Marciaによって類型化されたアイデンティティ・ステイタスとひきこもりとの関連づけを試みている。山

田 (2003) によると、典型的なひきこもりはアイデンティティ拡散と関連しており、自分が何をしたいのかわからず、周囲に言われるように仕事に就くこともできず、自分らしさを追い求めるあまり、人とかかわりが煩わしく感じられ、自分を守るようにひきこもるといふ。さらに、アイデンティティを確立した人や正常に見える早期完了地位の人であっても、極度のストレス状況に直面すると、一時的なひきこもりに陥る可能性があり、特に早期完了地位においてその傾向は顕著であるとされる。早期完了地位には、自分の将来に関する葛藤を経験せず、両親をはじめ、周囲の大人の価値観を批判することなく継承し、それに傾倒するという特徴がある (Marcia, 1966)。自身の考えや信念にこだわりがあることも指摘されている (岡田, 1993)。おそらく、強いストレスに直面した際、自ら乗り越えるという経験が少なく、柔軟な対応もとれないため、ひきこもりへと陥りやすいのであろう。そのため、ひきこもりに至っていない若者のひきこもりに対する親和的な態度との関連を探るうえでは、従来ひきこもりとの関連が指摘されてきたアイデンティティ拡散ではなく、早期完了というアイデンティティ・ステータスに着目するほうが有効と考えられる。そこで3つ目の指標として、岡田 (1993) による早期完了青年の特徴を測定するための早期完了特徴尺度を用いた。

方法

調査対象者

大学生 84 名 (男性 31 名, 女性 53 名) を調査対象者とした。平均年齢は 20.6 歳 ($SD=1.79$) であった。

尺度

(a) ひきこもり親和性尺度

ひきこもりに関する実態調査 (内閣府, 2010) において、ひきこもり親和群を定義するために用いられた質問項目をひきこもり親和性尺度として用いた。ひきこもりへの志向性やひきこもりに理解を示す傾向を測定するもので、「家や自室に閉じこもりたいと思うことがある」、「嫌な出来事があると、外に出たくなくなる」、「自室に閉じこもって外に出ない人たちの気持ちがわかる」、「理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方ないと思う」の 4 項目であった。内閣府 (2010) の調査では 4 件法であったが、本研究では 6 件法で実施した。

(b) 友人関係尺度

岡田 (1999) によって作成された青年期の友人関係の特徴を測定する尺度であり、「自己閉鎖」、「傷つけられることの回避」、「傷つけることの回避」、「快活的關係」の 3 因子、計 35 項目からなる。6 件法での評定を求めた。

(c) 不快情動回避心性尺度

福森・小川 (2005) によって作成された不快な情動やそれに伴う苦痛を自らのものとして受け止めることの困難さを測定するための尺度であり、1 因子 10 項目からなる。6 件法での評定を求めた。

(d) 早期完了特徴尺度

岡田 (1993) によって作成された早期完了青年の特徴を測定するための尺度であり、「硬さ・一貫性」、「両親従順性」の 2 因子、計 10 項目からなる。しかし、岡田 (1995) では、各因子において因

子負荷量の小さい項目が1つずつ削除されたものが使用されているため、本研究でもこれに倣い、各因子4項目ずつ、計8項目を使用した。6件法での評定を求めた。

(e) フェイス項目

フェイス項目として、性別、年齢、学年を記入する欄を設けた。

結果

ひきこもり親和性高群と低群の分類

内閣府 (2010) による調査では、「ひきこもり親和性」を示す4項目に関して当てはまるかどうか4件法 (1. はい, 2. どちらかといえばはい, 3. どちらかといえばいいえ, 4. いいえ) で回答が求められており、4項目すべてで「1. はい」と答えた者、または3項目が「1. はい」で残り1項目が「2. どちらかといえばはい」と答えた者が「ひきこもり親和群」と定義されていた。しかし、この定義に当てはまる者は全体の約4%であったことを考えると、対象者数の少ない本研究では、ひきこもり親和群に該当する者が非常に少なくなることが予想される。そこで本研究では、ひきこもり親和性に関する4項目で親和的態度を示した者、つまり4つの回答すべてが「4. やや当てはまる」、「5. 当てはまる」、「6. とても当てはまる」のいずれかであった者をひきこもり親和性高群と定義した。そして、それ以外の者をひきこもり親和性低群とした。それぞれの群に該当する人数、およびひきこもり親和性得点の平均値はTable 1に示す通りであった。なお、ひきこもり親和性得点は4項目の評定を合算し、それを項目数で割ったものをひきこもり親和性得点として算出した。親和性の高低、性別によって人数に偏りが見られるかを調べるために χ^2 検定を行ったところ、有意な偏りは見られなかった ($\chi^2(1)=1.25, n.s.$)。親和性得点に差があるかどうかを確かめるために、2 (親和性：高群・低群)×2 (性別) の2要因分散分析を行ったところ、親和性の主効果のみが有意であった ($F(1,80)=54.81, p<.001$)。

Table 1
ひきこもり親和性高群、低群における人数と親和性得点の平均 (SD)

	親和性高群		親和性低群		検定結果
	男性	女性	男性	女性	
N	8	20	23	33	$\chi^2(1)=1.25, n.s.$
親和性得点	4.69 (0.48)	4.68 (0.38)	3.33 (0.89)	3.64 (0.57)	主効果：親和性 $F(1,80)=54.81, p<.001$

友人関係尺度の検討

岡田 (1999) では、「自己閉鎖」、「傷つけられることの回避」、「傷つけることの回避」、「快活的関係」の4因子が下位尺度として確認されているが、重みなしの最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、4つの因子には収束しなかった。そのため、因子負荷の低い項目を削除しながら因子分析を繰り返した結果、3因子で安定することが確認された (Table 2)。1つ目の因子は、負荷量の高い項目として「相手の気持ちに気をつかう」、「友だちの内面に土足で踏み込まないようにする」、「友だちを傷つけないようにする」などが含まれていたため、「積極的関与の回避」

Table 2
友人関係尺度の因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3
相手の気持ちに気をつかう	.731	-.249	.063
友だちから傷つけられないようにふるまう	.638	.075	-.386
友だちの内面に土足で踏み込まないようにする	.624	-.103	.127
友だちを傷つけないようにする	.611	-.335	.183
お互いの約束をやぶらない	.610	-.207	.213
仲間の前で恥をかかないように気をつける	.589	.257	-.423
友だちをがっかりさせないように気をつける	.575	-.066	.160
友だちから無神経な人間だと思われぬように気をつける	.568	-.331	-.085
友だちに心配をかけないように気をつける	.554	.227	.197
相手にやさしくするように心がける	.553	-.408	.098
友だちからつまらない人だと思われぬように気をつける	.543	.003	-.032
相手に自分の意見をおしつけないようにする	.528	-.178	.191
楽しい雰囲気になるようふるまう	.525	-.302	.244
相手に甘えすぎない	.520	-.003	.127
友だちと意見が対立しないよう気をつける	.506	.104	-.363
相手の世界に口出ししない	.503	.333	.088
相手の言うことに口をはさまない	.503	.222	.041
お互いのプライバシーに立ち入らない	.494	.234	.035
※ 悩み事を相談する	-.029	.775	.364
※ 落ち込んだとき、話を聞いてもらう	-.097	.744	.453
※ 自分の心を打ち明けて話す	-.002	.738	.138
本当の気持ちは話さない	.282	.719	-.014
※ 友だちの心の支えになろうとする	-.322	.648	-.023
自分の内面に踏み込まないように気をつける	.388	.623	-.034
あたりさわりのない会話ですませる	.354	.570	-.276
浅い付き合いにとどめる	.286	.514	-.193
友だちからバカにされないように気をつける	.208	.480	-.313
友だちからどう見られているか気にする	.304	-.078	-.538
自分が落ち込んだ姿を友だちに見せないようにする	.151	.376	.493
冗談を言って相手を笑わせる	.301	-.373	.390

※は逆転項目

とした。2つ目の因子には、「悩み事を相談する」、「落ち込んだとき話を聞いてもらう」、「自分の心を打ち明けて話す」といった逆転項目が含まれ、自分の内面を打ち明けることを避けようとする「自己閉鎖」と命名した。第3因子に関しては、「友だちからどう見られているか気にする」、「自分が落ち込んだ姿を友だちに見せないようにする」、「冗談を言って相手を笑わせる」の3項目からなった

が、「友だちからどう見られているか気にする」は負の負荷を示した。つまり、「どう見られているか気にする」という意識は低いものの、「落ち込んだ姿を見せない」ようにしたり「冗談で笑わせ」たりするのである。落ち込んだ姿を隠し、友人を楽しませようとするのと他者の評価を気にしないこととは一見、相反するようにも思われる。現代の若者は周囲から期待されるイメージに合わせて振る舞う、いわゆるキャラを演じることが報告されているが（朝日新聞，2011），それは周りの目を気にするというよりもむしろ，そのほうがラクだからという。おそらく，辛い部分は表に出さず，友だちを楽しませる「明るいキャラ」を演じることも，日常の生活においてそのほうが楽しくてラクだからであり，他者の評価を気にしているという意識は薄いのであろう。以上の理由より第3因子は，「明るいキャラ作り」と呼ぶこととした。

不快情動回避心性尺度の検討

不快情動回避傾向項目 10 項目について，重みなしの最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ，1 因子性が確認された。因子負荷量の低い 2 項目（「気分が沈んでゆううつになる可能性のあることはしないほうだ」，「何かに失望したり不安になったりという体験は私にとってまったく邪魔だと思う」）を削除し，内的整合性（ $\alpha=.77$ ）を確認した（Table 3）。

Table 3
不快情動回避心性における因子分析結果

項目	因子1
私は，自分に失望することを何とかして避けたいという気持ちが強い	.648
自分がつらい気持ちになってしまわないよう，かなり気をつけている	.642
私は，落ち込んだり不安になったりすることを，必死に避けようとしている	.636
私は落ち込んだり不安になったりするのが非常に怖い	.631
私は，自分のみじめな気持ちになることに耐えられない	.570
不安を感じそうになると，私はそのような自分の感情を必死で否定したくなる	.425
もしも落ち込みや不安をまったく体験せずすむならば，そうしたい	.416
みじめな気持ちになるくらいなら，自分に起こっていることが事実ではないと考えたい	.396

早期完了特徴項目の検討

岡田（1993）では，「硬さ・一貫性」，「両親従順性」の 2 つの下位尺度が確認されているが，重みなしの最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ，2 つの因子には収束しなかった。そのため，因子負荷量の低い 1 項目（「自分は周りの大人や親の言うとおりに生きてきた」）を削除し，内的整合性（ $\alpha=.70$ ）を確認した（Table 4）。

ひきこもり親和性の高低，性別による各尺度得点

各尺度に含まれる項目の評定値を合算し，それを項目数で割ったものを尺度得点とした。そして尺度ごとに平均の尺度得点を算出した（Table 5）。なお，尺度得点が高いほど，その尺度の特徴がより顕著に反映されている。

Table 4
早期完了特徴における因子分析結果

項目	因子1
自分の価値観は両親と一致している	.635
親が望まないような生き方はしたくない	.586
両親の価値観に疑問を持ったことはない	.575
自分の信念は一貫しており、大きく変わらない	.470
学部や専攻を決めるとき、真剣に考えて決めた	.469
今所属している学部や専攻は迷わず決めた	.442
これから先も自分の信念は大きく変わりはないだろう	.359

Table 5
ひきこもり親和性の高低、性別による各尺度の平均得点 (SD)

	親和性高群		親和性低群		二要因分散分析の結果
	男性	女性	男性	女性	
【友人関係】					
積極的関与の回避	4.41 (0.34)	4.35 (0.41)	3.91 (0.58)	4.31 (0.49)	[主効果]親和性: $F(1,80)=4.63, p<.05$ [交互作用] $F(1,80)=3.37, p<.10$
自己閉鎖	3.47 (0.68)	3.11 (0.55)	3.23 (0.77)	2.71 (0.71)	[主効果]親和性: $F(1,80)=3.29, p<.10$ [主効果]性別: $F(1,80)=6.24, p<.01$
明るいキャラ作り	4.33 (0.53)	4.27 (0.48)	4.04 (0.71)	4.34 (0.47)	
【不快情動回避】					
	3.78 (1.01)	4.29 (0.78)	3.58 (0.94)	3.83 (0.64)	[主効果]性別: $F(1,80)=3.43, p<.10$
【早期完了】					
	3.65 (0.79)	3.89 (0.73)	3.36 (0.75)	3.68 (0.68)	

ひきこもり親和性の高低、および性別によって各心理的特性に違いが見られるかどうかを検討するために、友人関係の3つの下位尺度(積極的関与の回避、自己閉鎖、周囲が期待する自己像との葛藤)、不快情動回避傾向、早期完了特徴のそれぞれの平均尺度得点を従属変数として、2(親和性:高群・低群)×2(性別)の2要因分散分析を行った。その結果、ひきこもり親和性による主効果は積極的関与において有意であり($F(1,80)=4.63, p<.05$)、自己閉鎖で有意な傾向が認められた($F(1,80)=3.29, p<.10$)。性別の主効果は自己閉鎖で有意であり($F(1,80)=6.24, p<.05$)、不快情動回避傾向で有意な傾向が見られた($F(1,80)=3.43, p<.10$)。また、積極的関与の回避においてのみ、ひきこもり親和性と性別による交互作用に有意な傾向が見られた($F(1,80)=3.37, p<.10$)。

考察

本研究では、一般大学生をひきこもりに対する親和性が高い群と低い群とに分け、2群における心理的特性(友人関係、不快情動回避心性、早期完了特徴)を比較することで、ひきこもりに対して肯定的な態度を示す若者の心理的特性を明らかにすることを目的とした。以下、それぞれの心的

特性について考察を行った。

友人関係

友人関係に関しては、因子分析によって「積極的関与の回避」、「自己閉鎖」、「明るいキャラ作り」という3つの下位尺度が確認された。

まず「積極的関与の回避」では、ひきこもり親和性高群のほうが、友人の気持ちに気をつかったり、内面に土足で踏み込まないようにしたり、友だちを傷つけないようにしたりするというように、友人との内面的な関係を避け、表面的に円滑な関係を保とうとする傾向が強いことが示された。しかし、この傾向は女性では見られなかった。そのため、ひきこもりに肯定的な態度を示す男子大学生が「積極的関与の回避」を志向しやすいことが示唆された。また、「積極的関与の回避」における平均尺度得点を見ると、親和性低群の男性の得点のみが低いことがわかる。つまり、ひきこもりに対する親和性の低い男子大学生は、内面的な友人関係を築いている、あるいは気のおけない友人が存在することがうかがえる。

次に「自己閉鎖」では、ひきこもりに対する態度の違いにより、その「自己閉鎖」に差が見られた。親和性高群において、自分の意見や考え、悩みごとなどを友人に話さない傾向が強いことが示され、自己の内面をさらけ出すことの難しさを抱えている可能性が考えられる。また「自己閉鎖」は女性に比べ男性のほうが、その傾向が強いことが示された。この結果は、女性のほうが自己開示度が高いとする自己開示研究 (e.g., 榎本, 1997) と一致するものであろう。

「明るいキャラ作り」得点は、ひきこもり親和性の高低による差が見られなかった。いずれの群においてもこの傾向が強いかどうかに関しては、本研究の範疇を超えるため詳細に論じることはできない。しかし、現代の若者においてありのままの自分を出すことよりもキャラを演じるほうがラクになっている (朝日新聞, 2011) ことを考えると、いずれの群においても「明るいキャラ作り」の傾向は強いだろうと推測される。つまり、キャラ作りの傾向は、ひきこもりに対する態度とは関連がなく、一般大学生にとって当たり前のこととなっているのかもしれない。

不快情動回避傾向

「不快情動回避傾向」に関しては、性別による主効果の有意傾向が認められたのみで、ひきこもり親和性による違いは見られなかった。つまり、男性に比べ、女性のほうが不快な情動を受け止めることへの困難を示す傾向にあることが示されたのみで、ひきこもりに対して肯定的な態度を示すからといって、抑うつ、不安といった感情と向き合うことの困難さがあるわけではないことが示唆された。しかし、不快情動の回避傾向の強い者は集団から孤立しないよう表面的に円滑な関係を志向するという報告もあり (福森・小川, 2006)、間接的ではあるが不快情動の回避傾向とひきこもり親和性とは関連する可能性が示唆されている。友人関係を介した両者の関係については、今後の検討課題であろう。

早期完了特徴

進路選択や信念について硬さと一貫性をもち、両親の規範や価値観を継承するという「早期完了特徴」(岡田, 1993) においては、ひきこもり親和性の高群、低群による差が見られなかった。本研究では、早期完了地位の人は一時的なひきこもりに陥りやすい (山田, 2003) という理由から、ひ

きこもり親和性との関連が予測される特性として早期完了特徴を取りあげたが、そのような関連は見られなかった。この理由の1つに、ひきこもりに陥りやすい人とひきこもりに対して肯定的な態度を示す人とを同列に扱うべきかという問題が考えられる。つまり、ひきこもりに対する親和性が高いからといって、ひきこもりに陥る可能性が高いとはいえないのかもしれない。ひきこもりに対して理解や共感を示す人である可能性も十分に考えられる。

まとめと今後の課題

以上より、ひきこもりに肯定的な態度を示す若者における心理的特性には、友人関係における自己の閉鎖性が見られること、また男性に限っては友人に対する積極的関与の回避傾向も見られることが明らかになった。しかし、本研究で取りあげた「ひきこもり親和性」をどう捉えるかには慎重になる必要がある。友人関係における積極的関与や内面の開示に困難を抱える故に、「ひきこもり」に対して高い共感を示しているだけの可能性も考慮すべきであろう。田中(2005)は“私たちのほとんどは、表面的には社会的に適応した形をとりながらも、時宜に応じて一時的にひきこもったり、心理的にある部分を撤退させながら、何とか日常をやりくりしている(pp.66)”と述べているが、ひきこもり親和性の高い人も、友人関係上の困難を抱えながらも、不安や抑うつといった不快な感情と向き合うことで、特異な事態に陥らずにすんでいるのかもしれない。このような視点に立つと、ひきこもりに対して肯定的な態度を示す若者に着目した研究は、今後、何らかの困難、問題を抱えながらも、危機的なひきこもり状態に陥らずにすむ要因を明らかにするうえで有益な視座を提示してくれるであろう。

引用文献

- 朝日新聞 (2011). キャラは保険, 見守って 1月29日朝刊
- 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 福森崇貴・小川俊樹 (2005). 不快情動回避心性尺度の作成 筑波大学心理学研究, 29, 125-130.
- 福森崇貴・小川俊樹 (2006). 青年期における不快情動の回避が友人関係に及ぼす影響——自己開示に伴う傷つきの予測を媒介要因として—— パーソナリティ研究, 15, 13-19.
- 加藤弘通 (2005). ひきこもりの心理 白井利明(編) ころとからだの処方箋 4 迷走する若者のアイデンティティ——フリーター, パラサイト・シングル, ニート, ひきこもり—— ゆまに書房 pp.189-213.
- 厚生労働省 (2003). 「社会的ひきこもり」に関する相談・援助状況実態調査報告 10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン 2003年7月28日 <<http://www.mhlw.go.jp/topics/2003/07/tp0728-1.html>> (2011年2月19日)
- 厚生労働省 (2010). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン 厚生労働省報道発表資料 2010年5月19日 <<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000006i6f.html>> (2011年2月19日)
- 蔵本信比古 (2008). 社会的ひきこもりに関与する心理的特性の検討 心理臨床学研究, 26, 314-324.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.

- 松本 剛 (2003). 大学生のひきこもりに関連する心理的特性に関する研究 カウンセリング研究, **36**, 38-46.
- 村尾泰弘 (2005). ひきこもる若者たち 村尾泰弘 (編) うつの時代シリーズ 2 ひきこもる若者たち 至文堂 pp.9-14.
- 内閣府 (2010). 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査) 内閣府ひきこもり調査 2010年7月 <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_gaiyo_index.html> (2011年2月19日)
- 岡田 努 (1993). 自我同一性早期完了地位についての一考察 新潟大学教育学部紀要, **35**, 57-68.
- 岡田 努 (1995). 自我同一性早期完了地位についての一考察 (2)——学部間比較を中心として——新潟大学教育学部紀要, **36**, 219-228.
- 岡田 努 (1999). 現代青年に特有な友人関係と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, **9**, 29-39.
- 岡田 努 (2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究, **15**, 135-148.
- 岡本祐子 (2003). ひきこもりの定義 岡本祐子・宮下一博 (編) 荒れる青少年の心 2 ひきこもる青少年の心——発達臨床心理学的考察—— 北大路書房 pp.2-3.
- 斉藤 環 (1998). 社会的ひきこもり—終わらない思春期— PHP 研究所
- 田中千穂子 (2005). ひきこもり——関係性と時代の成熟という視点から—— 村尾泰弘 (編) うつの時代シリーズ 2 ひきこもる若者たち 至文堂 pp.65-76.
- 山田敏久 (2003). 「ひきこもり」のレベル 岡本祐子・宮下一博 (編) 荒れる青少年の心 2 ひきこもる青少年の心——発達臨床心理学的考察—— 北大路書房 pp.28-34.